

発行日 2012 年 9 月 10 日
編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア
発行＝くにたち中央図書館

『くにたちの地名』シリーズ 5
小字・他(市制施行前)

国立 小字分布

A: 青柳
I: 石田

武蔵野

田無道

中央線

江戸街道

万願寺道

石田街道

甲州道中北

甲州道中南

栗原

寺之下

岨之下

出井崎

天神下

下新田

向新田

三屋上

土新田

芝切場

御経塚

東之原

本田道

甲州街道

南武線

下之下

一本杉

下峰下

中峰下

上峰下

鶴久保

谷川上

西之原

峰上

地蔵街道

拝島道北

田無

田村道

武蔵野

田無道

下ばけ

西府

15,000

106%

By T.O.

1

(字と地番について)

一般に見て土地に番号、いわゆる地番がつけられるようになったのは明治以降のことです。この土地に番号をつけることは明治新政府がその基盤としての地租を確保するために地租改正を行い、村を単位に土地の一筆ごとに地番をふり、一村限図（地引絵図）、地引帳を作成し、土地の所有者を明確にして地券を発行しました。それに基づいて地租を確定するために行われたものです。

江戸時代の検地において作られた検地帳に記載された、名が小字として、多く使われ。村が大字としての名になりました。国立においては、谷保村、青柳村、石田村が明治以降谷保村としてまとめられ、大字となりました。

その後、この租税徴収或いは土地の売買を目的に土地につけられた地番が、戸籍の番地としても使用されるようになり、住居表示としての役割をもつようになりました。

地番は一村単位で字（小字）を基礎にして通し番号でつけられました。

明治21（1888）年四月、市制・町村制が公布され（明治22年4月実施）され、大規模な町村合併が行われました。地番については、新しい町村が成立しても旧来の地番を使用し、数か村を合併して成立した村ではもとの村々（旧村）はそれぞれ大字となりました。それぞれの大字の区域は互いに錯綜しているため地番は複雑になりました。

明治31（1898）年の戸籍法でこの地番を番地として使用することが確定されました。

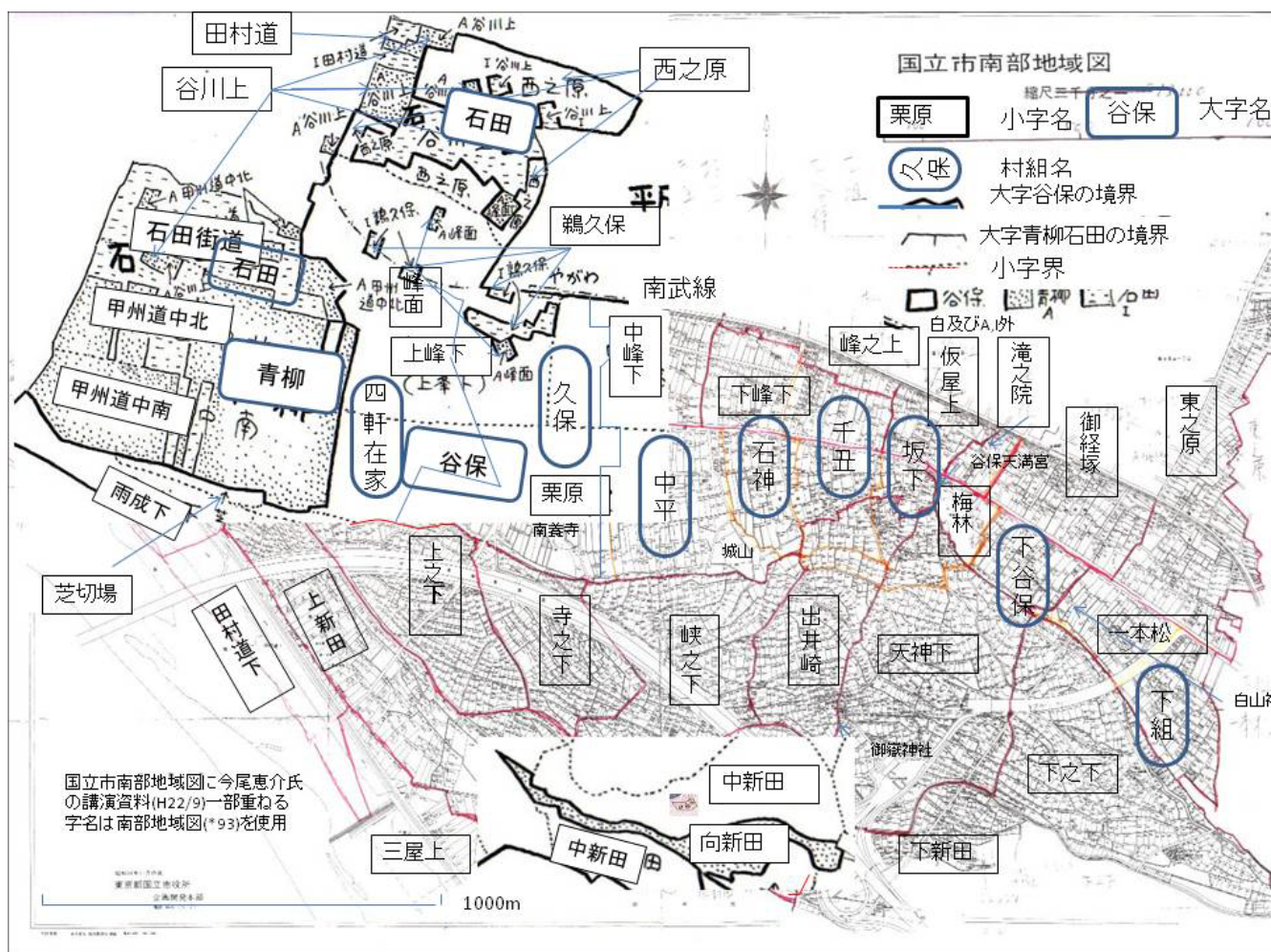
2. 谷保・青柳・石田のむら・小字名・番地について

大字谷保・青柳・石田のむらと小字番地は、図1-1及び図2-1のようになっています。新町名への移行で、小字は、消えつつあります。

1) 南武線以北地域

大学町の建設と富士見台団地の建設で、すべて新しい町名に変わり、江戸時代降使用されてきた小字はなくなりました。

2) 南部地域の大字・小字



3. 旧谷保村・青柳・石田の小字

旧谷保村・青柳・石田の小字と地番は次表のように村ごとに連番でつけられていました。大正10年谷保村全村図（国立市史中巻付図・昭和44年南部地域図より抜き出した）

谷保					青柳		石田		
下之下	1~574	一本松	4049~4265	峰上	7206~8348	向新田	*1~154	(記載無)	1~479
天神下	675~1246	東原	4266~4555	西之原	8349~8827	119~125は中新田内に飛番地		田無道	480~498
出井崎	1247~1628	御経塚	4556~5122	(記載無)	8828~8877	甲州道中南	155~384	谷保下	499~500
峡之下	1629~2174	梅林	5123~5212	拝島道北	8878~8924	甲州道中北	385~584	青柳入	501~550
寺之下	2175~2478	滝之院	5213~5280	拝島道北	8935~9540	甲州道中北	385~604	石田街道	551~649
上之下	2479~2970	飯屋上	5281~5833	雨成下	9541~9544	峰西	605~615	鶴久保	650~690
(記載無)	2971~2976	栗原	5834~6444	田村道	9545~9546	谷川上	616~692	谷川上	691~748
上新田	2977~3283	上峰下	6445~6840	三屋上	9547~9548	武蔵野	693~846	田村道	749~771
中新田	3284~3770	中峰下	6841~7088	武蔵野	8925~9034	拝島道北	847~889		
下新田	3771~4048	下峰下	7089~7206			下はけ	890~922		

芝切場は、三村の入会地で、地番無

石田の記載のない地番（1~479）は、現在の日野市万願寺町や石田町の台帳に記載され、小字として塚越、三角などがつけられていました。

4. 国立の大字

1) 大字国立の誕生

昭和17(1942)年には、都区整理事業施行に伴い、それまでの大字や字の区域を変更して、新しく大字東区を設置することが決まりました。昭和18年には、耕地整理の施行にともなって、大字谷保字仮屋上・峰上・拝島道北の地域と大字青柳下ハケを含め、大字谷保と大字青柳の一部を大字国立の中区とすることに決めて昭和19年から実行され、4番目の大字国立が誕生しました。(*1・P188)

西区については、大字青柳字武蔵野など一部は従来の字となっていました。

2) 立川市羽衣町への編入

昭和19年都区整理事業施行に伴い、立川市と谷保村にまたがる区域で、村域のうち、一部を立川に編入して立川市羽衣町(はごろもちょう)にすることが東京都長官から谷保村村会に諮問があり、村会はこれを承認しましたが、実行されませんでした。

戦後立川市との合併が再燃したとき、昭和24(1949)年に大字谷保字田無道、西ノ原、拝島道北、大字青柳字谷川上、大字石田字田村道の一部が立川市に移管され羽衣町となりました。(*1, P188, *2, 下巻 P197)。

3) 町制施行後の行政区分と地番

昭和26(1951)年に町制をひいてから、昭和42(1967)年に市制後現在の町名になるまで、行政上、江戸街道を境に南側の旧谷保村からなる谷保地区(大字谷保・青柳・石田)と、北側の国立地区(大字国立)は東区、中区、西区、中央線北側の北区と4区分しました。

4) 大字国立の番地

次のようにつけられました。

東区 大字国立 1～151 (一部は、旧地番から小字をとって継承)

中区 大字国立 152～237

西区 大字国立 238～337

5) 南区など行政上の地域区分と呼称

南区は、戦後谷保村から南部の多摩川の間地域を指し、行政上、南区と呼称しました。地番は旧来通りです。また、中央線、北側の地域は立東地区と北区と行政区分されて、地番は、大字谷保、大字青柳の小字をそのまま継承しています。

国勢調査、選挙、固定資産税の出張徴収所、民生委員の担当区域などは、地勢にあわせて入り組んで分けていました。(*26)

固定資産税の出張徴収	*26, Vol020(30-9)
中区	公民館
東区	應善寺
立東	自治館
西区	第二小学校

5. 大字谷保に含まれる小字

1) 下乃下（しものした）

府中崖線下、南部は一本松、西部は天神下、西南部が向新田、その他は府中市に接している地域。田畑でしたが、宅地化が進んでいます。

2) 天神下（てんじんした）

谷保天神の下の地域。北部は滝乃院、梅林、西部は出井崎、南部は府中用水、東部は下乃下と接する地域。

3) 出井崎（でいさき）

延宝検地帳にでい崎として田の広さ477畝（約1400坪、4750㎡）として谷保村最大の記録が残っています。北部は栗原、仮屋上、西部は峡之下、東部は天神下、南部は府中用水で下新田に接する地域です。

4) 一本松（いっぽんまつ）

甲州街道から二町ほど南に入った府中崖線段丘上に位置する地域です。このあたりの小字名は一本松といいます。ここには白山神社というむらの守護神があります。菊理姫命を神としています。素戔鳴尊を祭神とした八雲神社が合祀されています。寛永年間の創祀という伝えがあります。（*5-4）

縄文時代の遺跡が多く、時々土器石器類が発見されています。

昔から野菜の苗（茄子、胡瓜、甘藷など）の産地として知られています。

5) 岨之下（はけのした）

峡ノ下（さきのした）、峡の下、岨之下 ともかかれていましたが、現在は「岨の下」の表記になっています。「さき」は、青柳崖線のはけをいいます。

寺之下、栗原、出井崎と接し、南部は、府中用水を境に下新田と接する田圃でした。平成になって、一部が、泉一丁目、四丁目と新しい地番がつけられました。

6) 寺之下（てらのした）

寺は南養寺の「下ハケ」に位置するので呼ばれていました。上之下、栗原、峡之下と府中用水に接した田圃でした。平成になって、一部が、泉一丁目、四丁目と新しい地番がつけられました。

7) 上乃下（かみのした）

青柳崖線の下、市域西部地域。おんだしがあります。南部は府中用水をはさんで上新田と接しています。一部が、泉一丁目、三丁目、四丁目と新しい地番がつけられました。

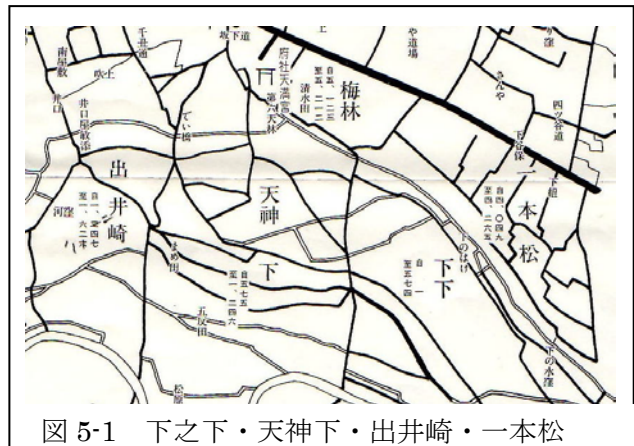


図 5-1 下之下・天神下・出井崎・一本松

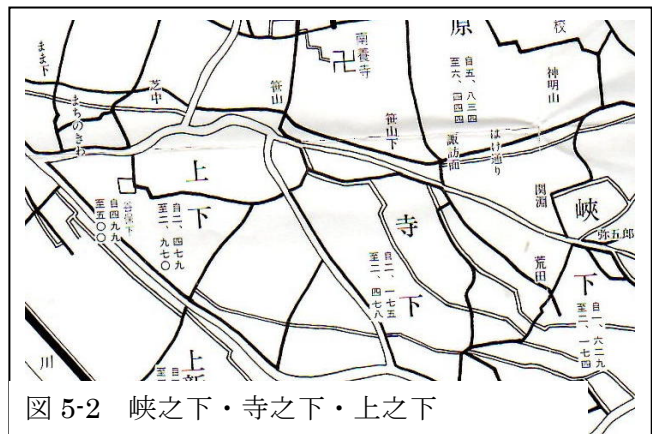


図 5-2 岨之下・寺之下・上之下

8) 上新田（かみしんでん）

多摩川土手と府中用水に囲まれた市域西方の新田でした。中央高速道路北部一帯が、泉三丁目に、東部地域の一部が泉一丁目に編入されました。



図 5-3 上新田・向新田・中新田・下新田

9) 中新田（なかしんでん）

府中用水と本宿用水に囲まれた田圃地域。北部は現府中市と接しています。一部が泉町一丁目、二丁目に編入されました。谷保緑地があります。

10) 下新田（しもしんでん）

府中用水をはさんで、峡之下、出井崎、天神下、接する南部の田圃で、南部は向新田に接していました。新田内に青柳の飛地がありました。西部の一部は、泉町一丁目に編入されました。

11) 東之原（ひがしのはら）

市域の東端部を縁取るように、南北に長い地域です。御経塚の東隣で、一部南武線北側が、平成6年に富士見台1丁目に編入されました。

12) 御経塚（おきょうづか）

南武線の谷保駅周辺で、現在は一部が団地街に入っています。大学町が形成されるまでは、南は甲州街道から北は、拝島道まで、東は、東之原、西は仮屋上と滝之院に囲まれた地域

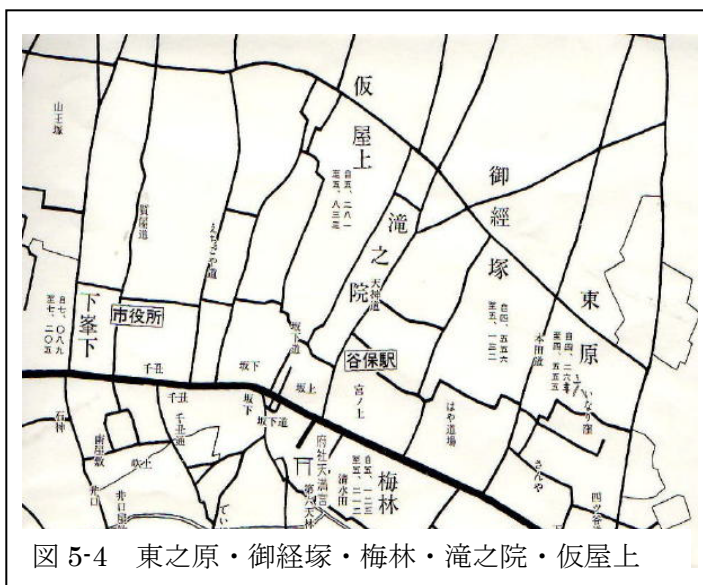


図 5-4 東之原・御経塚・梅林・滝之院・仮屋上

でした。昔は、谷保天満宮の近くに塚がありました。空海上人が諸国巡錫のみぎり、一万陀羅の経巻を埋めた塚だとも言われ、一説には、^{しょうじもと}正治元（1199）年1月13日、源頼朝が入寂したとき、天満宮別当寺安楽寺開山活円僧正が手向けの読経をしたところだとも伝えています。現在、塚はありません。（*26S46/10）

13) 梅林（うめばやし）

近接した府中崖線と青柳崖線を含む甲州街道以南の地域です。天満宮、その梅林があります。

14) 滝之院（たきのいん）

谷保天満宮の甲州街道を挟んだ北側で、西と北側を仮屋上、東側は、御経塚に囲まれる地域でした。現在は南武線までの狭い範囲に位置する地域です。滝之院があります。現在は無住職寺で、「国立ふれあい霊園」と名付けられて

います。『谷保案内』の作者、遠藤由晴の墓があります。

15) 仮屋上（かりやうえ）

かつては、西側は下峰下、峰上とをえちご道で、東側は御経塚に挟まれた甲州街道から以北で、北部は拝島道で拝島北道と接する地域。建治元（1275）年、谷保天満宮に扁額を奉納するため、勅使が京都から下向した際、仮の宿を設けたところからこのあたりを「かりやうえ」と呼ぶようになりました。

16) 栗原（くりばら）

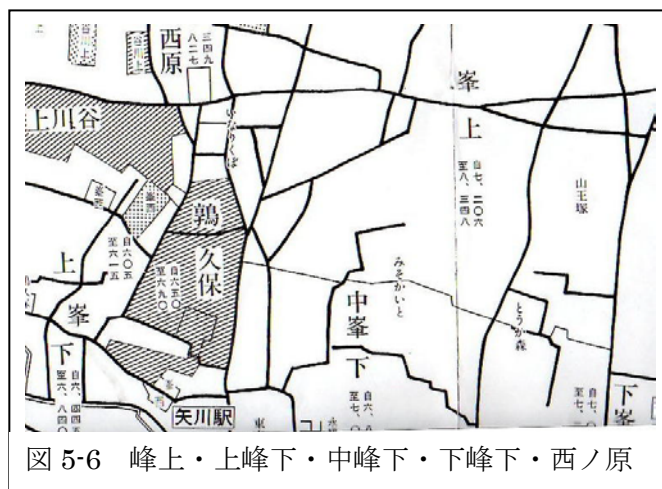
甲州街道以南の青柳崖線とその上に広がる青柳面に広い面積を占める地域です。南養寺から城山に残る国立で最も古い地名



で、もともとはこの辺りから府中分倍にかけての地名でした。四軒在家、久保、中平、石神、千丑、坂下の村が構成されて、谷保村の中心地域として住居がありました。

17) 峰上・上峰下・中峰下・下峰下（みねうえ・みねした）

富士見台及び矢川団地をはさんで、西から東に立川段丘があります。この段丘の上（市役所南側の南武線以南から、立川崖線上の細長い地域です、国立町がつくられるまでは、北は拝島道まで、東は仮屋上に接し、西側は、おおそ江戸街道と地藏街道を境とした地域でした）を「峰上」、段丘の下を「峰下」と言いました。



富士見台団地が誕生すると

ともに、小字峰上はなくなりました。峰下は、西から上峰下（矢川駅の南側から西側にかけての比較的広い地域）、中峰下（矢川駅南東側から公団富士見台三丁目住宅南側にかけて、甲州街道から南武線敷までの間に広がる地域）、下峰下（西側は旧中平道、東側はえちごや道が境となって、崖線南側から甲州街道にかけての一带）と区分されていました。

18) 西ノ原（にしのはら）

旧江戸街道に挟まれた地域。東乃原に対する西の意です。現在は富士見台三、四丁目に編入されました。

19) 拝島道北（はいじまみちきた）

古道の拝島道の北に位置する地域。大半が現在の西、中に編入されました。

国立駅は、大字谷保字拝島道北 9110 他でした。青柳の飛地も同名で田無道を挟んで南北に展開していました。

20) 武蔵野 (むさしの)

市域北部

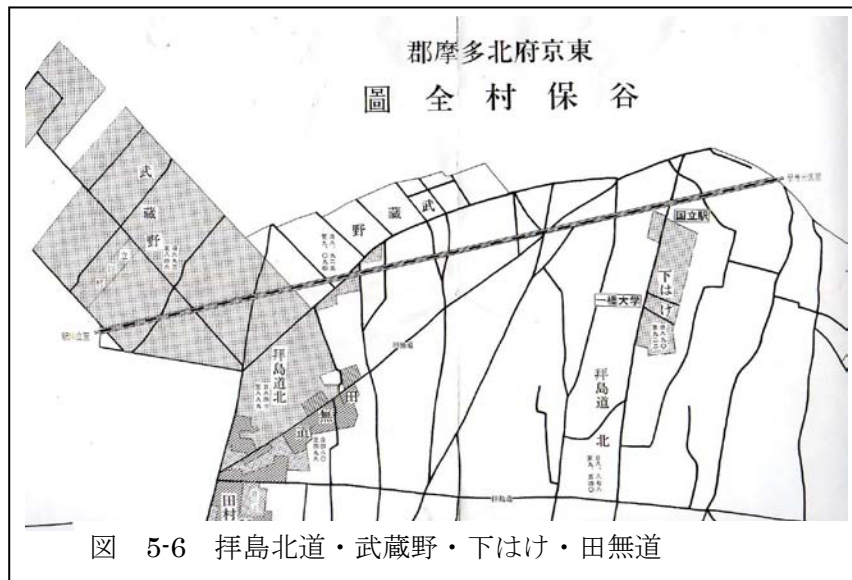


図 5-6 拝島北道・武蔵野・下はけ・田無道

で立川市・国分寺市と境界が接し、中央線をはさんだ地域。北、西に編入されました。青柳飛地として同名の字が、立川に接して、旧立東、現在の北に展開していました。

21) 雨成下 (あまなれした)

市域南西端の多摩川河川敷と青柳崖線の一部及び府中用水と多摩川土手に挟まれた沖積を含む地域です。

22) 田村道下 (たむらみちした)

市域南部で、田村道から東部の多摩川と土手に囲まれた細長い地域。一部が泉三丁目に編入されました。

23) 三屋上 (さんやうえ)

田村道下の東部、多摩川と土手に囲まれ、三屋地域 (現府中市) と接した地域。一部が泉二丁目に編入されました。

6. 大字青柳に含まれる小字

1) 向新田 (むかうしんでん)

南部は本宿用水をはさんで現府中市と接し、北部は、大字谷保の下新田と接した南部の田圃。大字谷保の中新田の中にも飛地がありました。

2) 甲州道中南 (こうしゅうどうちゅうみなみ)

青柳面の甲州街道から南側の一帯で、市域の西南に位置しています。石田青柳入地域が入り組んで3分割されています。平成11年に、一部が青柳一丁目、三丁目に新しい地番に編成されました。

3) 甲州道中北 (こうしゅうどうちゅうきた)

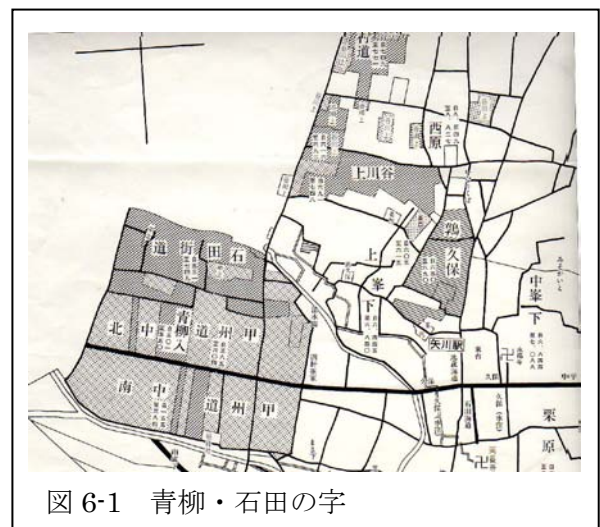


図 6-1 青柳・石田の字

た)

市域西部の甲州街道から北側に広がる地域です。石田青柳入地域が複雑に入り組んでいるため、飛地状に3つの部分に分かれています。平成11年に、一部が青柳一丁目、三丁目に新しい地番がつけられました。

4) 峰西（みねにし）

峰面（みねづら）とも書かれています。青柳段丘上、峰上の西地域の飛地です。

5) 谷川上（やがわかみ）

立川段丘上に「谷川上」（やがわかみ）という小字があります、むかしは、矢川とか谷川とかあて字を使って書いたものと思われます。（*3・P115）

石田青柳入地域の北側に飛地状にある小さな地域です。

「ヤガワ上」という字名は谷川上と書きますが、その谷川は矢川のことだといひます。（*2 下巻 P649）

6) 武蔵野（むさしの）

西部は現立川に接し、北部は古道の五軒屋街道に接する青柳の飛地。現在は北に編入されました。

7) 拝島道北（はいじまみちきた）

拝島道の北側、西側は田村道、南側は江戸街道に接する青柳の飛地。西に編入されました。

8) 下はけ（しもはけ）

現在の大学通り・一橋大一部を含む青柳の飛地。大学町をつくるとき吸収されました。国分寺崖線下であり下はけといったのでしょうか。崖線上には、はけ上（現国分寺市）の字がありました。

7. 大字石田に含まれる小字

1) 田無道（たなしみち）

立川市と田村道で境界をわけ、田無道左右に展開した飛地。西に編入されました。

2) 谷保下（やぼした）

上新田の中にある石田の飛地。谷保村の下の意でしょう。全域が平成16年に、泉三丁目に新しい地番がつけられました。

3) 青柳入（あおやぎいり）

市域西部の甲州街道を挟む台地上の地域。青柳と石田の小字界が入り組んで複雑な地形となっていました。平成11年に青柳一丁目、三丁目に新しい地番がつけられました。

4) 石田街道（いしだかいどう）

甲州街道の北側は立川市と接し、東側は上峰下に接します。地域内部に青柳の飛地が混在していました。平成11年に青柳一丁目、三丁目に新しい地番がつけられました。

5) 鶉久保（うずらくぼ）

「矢川駅」附近は、大字石田小字鶉久保と言って、石田村飛地でした。峰上段丘下の草深いところで、むかしは鶉などたくさんいたのでしょうか。（*3・

P116)

6) 谷川上 (やがわかみ)

江戸街道と谷川 (矢川) 北側に展開する石田の飛地。現在の東京女子体育大の敷地あたり。一部が平成になって富士見台四丁目に編入されました。

7) 田村道 (たむらみち)

田村道と拝島道が交差する近くで、谷保西之原地域の北西端の小字。現在一部が、富士見台四丁目に編入されました。

8. 入会地

1) 芝切場 (しばきりば)

青柳崖線上の道路と府中用水の間にある東西に長い地域です。ここには地番がありません。昔は、この辺りも多摩川の河川敷だったのが、川が南方によったあとに、広い空き地ができました。そこに葦や芝が茂るようになり、芝は堤防のために三村の入会地として使われていました。平成16(2005)年に矢川三丁目に組み込まれました。

9. 大字・小字以外の地名他

9-1 ハケ上、西側地域の地名

1) (ミノワ)

矢川の上流は、段丘状が続いて立川市に接しています。このあたりを「ミノワ」と称しています。

大正13年の『北多摩郡谷保村郷土誌』によれば「村の西北端ニ小高キ所アリ、……此ノ小岳ニ近ク塚ニカ所アリ、立派ナル人ヲ埋メタルモノナリトカ、大切ナル物ヲ共埋メタルモノナリトカ伝エル所、詳ナラズ、コノ小岳ニ三輪城ナルモノノアリテ、城主ヲ三輪次郎ト言ヘリと伝フ、今ハ全クソノ面影ナシ」とあり、往古ここに「ミノワ城」なるものがあって、ミノワ次郎という豪族がいたという言い伝えがありますが、確証はありません。(*3・P114,*5・P179,*6)

2) 畑中 (はたけなか)

「畑中」は南方ハケ上の辺りで、文字通り畑の中に散在農家があったことからつけられたものです。

3) 峰坂 (みねっさか)

国立市役所西側から甲州街道にでる途中の坂を「みねっさか」といっています。

4) みのした 峰下が訛ったものでしょう。(*3)

5) ひゃあしがや

この地方の訛語で、「林が家」あるいは「林が谷」が正しいのでしょうか。み

のわ段丘に続く南武線矢川駅北方段丘上、矢川団地の東外れにあった雑木林がそうであったと思われます。(*3・P76)

6) 台畑 (でやあばたけ)

「ひゃあしがや」の北部台地、土地の人は訛って「でやあばたけ」と言っています。

7) 橋場 (はしば)

矢川が甲州街道と交差するあたりで、久保むら、矢川が接するところに石橋があり、このあたりを「橋場」(はしば)といいます。久保の永福寺ようふくじの4世住職が元禄年間に石橋を架けたといわれています。

8) 橋上 (はしうえ)

橋の上手に五智如来の祠がありますが、これより以西は四軒在家となります。「はしば」に対して、その上手は「橋上」(はしうえ)と言っています。

(*3)

9-2 ハケ上、中央地域の地名

1) 笹山 (ささやま)

南養寺の西側、石田街道に沿った段丘上のあたりを「ささやま」といいます。このあたりに竹藪が多くあります。

2) 原三家 (はらざんや)

久保むらの矢川周辺。ここは原三家 (はらざんや) と言って、大正時代までは数軒しか家がありませんでした。ムラザンヤとも呼ばれました。

この北方には、久保むらの鎮守稻荷宮があり、久保のことを「いなりくぼ」と称した時代もありました。(*3)

3) 中道 (なかみち)

中平、第一小学校前から西へ、南養寺裏に通じる道を「なかみち」と言いますが、小学校前の十字路周辺を一般に「なかみち」と呼んでいました。(*3)

4) 栗原郷 (くりはらごう)

栗原郷は、大化の改新の時に、制定された名称であるといわれています。『新編武蔵風土記稿』には上谷保、下谷保、本宿、屋敷分 (現府中市) が分倍庄栗原に属すると記載されています。この分倍庄は国府域の公領を示すものでしょう。多摩川北側のこの地域に中世末-近世初頭の広域地名として栗原郷が認められ、四ヶ村が近世村として成立した後は、栗原は上谷保村の小字として残されました。栗原地域に三田氏館があり、当郷は三田氏所領の可能性もあります。(*22・P1055)

栗原のいわれは、この地に栗の木が多かったことから出ていたようです。もう一つ『武蔵野名勝図絵』の著者植田もうしん猛繒は「菅原」(すがわら)が訛って「くりばら」となったのではないかと推察しています。その理由は栗原地区の西方に「城山」という古い館跡があって、その館主が「菅原」を名乗って

3) 坂上（さかうえ）

天満宮表大門あたりが坂の一番高い所で、東から3軒は、かつて、道路が切り崩されたため、今では当時より1メートル以上屋敷が高くなっており、ここだけ「坂上」と呼ばれています。屋号です。

4) 日経塚（にっきょうづか）

谷保天満宮の北方丘状にありました。徳川幕府の手で土地改正が行われ、この塚を中心にして谷保の水帳を記帳したところだと伝えられています。

(*5・P147)

9-4 はけ下、西側地域の地名

1) 雨成（あまなれ）

アマナレといい、根川の淵、または府中用水の取水口にあたり、その字名です。この淵で行う雨乞祭りからでたものと言われます。ひでのりの夏に各むら総出で、竹で編んだ強大な竜を先頭にたてた行列が谷保天満宮の弁天池から出発し、家ごとに汲んだ水をかけあいながらこの淵に至り、雨乞いをしていました。 (*2 中巻・P655)

2) ママ下

四軒在家のはけ下辺りに残っています。「ママ下」はメメ（真間－アイヌ語で崩れやすいの意味）が語源であると言われています。 (*2 中巻・P655,*6)

3) ヨミトリ／マチノキワ

ママ下の南側に「ヨミトリ」と「マチノキワ」といった府中用水の堰に関する地名があります。ヨミトリはヨメドリマチのことで、マチは堰をさし、マチノキワは、堰の近くという意味をもつと言われています。(*6)

4) 諏訪面（すわめん）

かつては、南養寺の南側底部からの湧水を源として、はけ下から流れ、池となっていました。今は存在していません。

5) 諏訪神社（すわじんじゃ）

諏訪神社は谷保山南養寺東南方下にあり、社の社守は 上の杉田氏がしていました。神社のあったあたりを諏訪面

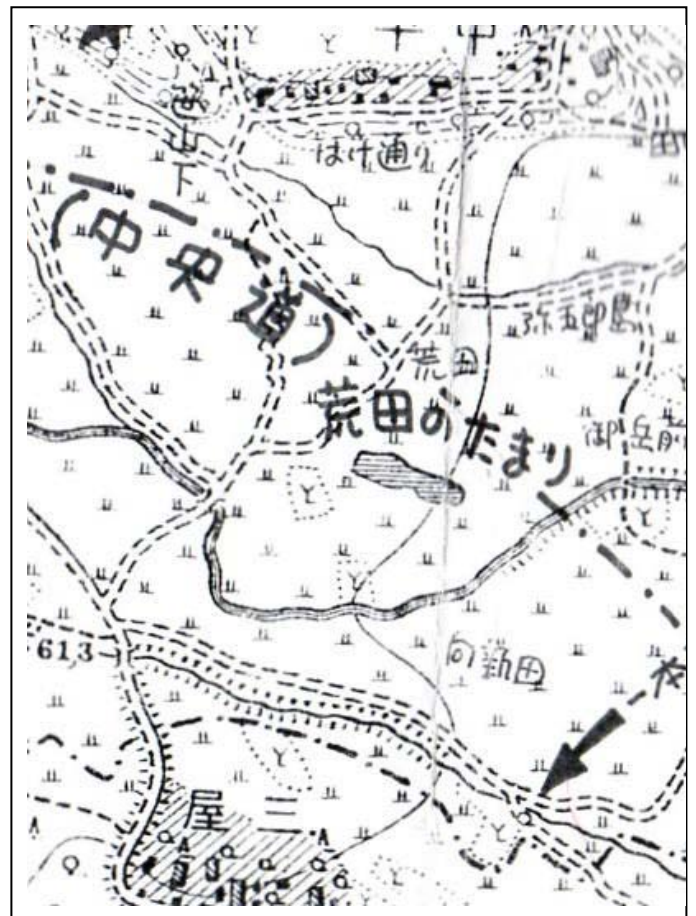


図9-2 明治39年測量、府中
弥五郎島・御岳神社・荒田のたまり（今尾恵介氏追記）

と呼び、段丘下が深瀬になっていたので、諏訪ヶ淵と呼んでいました。江戸時代、多摩川の洪水で谷保田圃がどろ海と化したことから廃社されたいようです。

6) 弥五郎嶋（やごろうじま）

城山南あたりに残る古い地名で、弥五郎の由来はわかりません。府中用水の堰としての弥五郎嶋堰があったとされます。（※ 6）

多摩川の氾濫で土砂が流れ、わずかに盛り上がっていたと思われます。

7) 荒田のたまり・別名：津戸ヶ淵（泉1－8－3：北多摩二号処理場辺り）

北多摩二号処理場辺り、江戸時代初期に起こった多摩川洪水のあとにできた沼地で、現存はしません。多摩川の氾濫からの字名です。津戸ヶ淵とも呼ばれ、津戸三郎為守の大蛇退治の伝説があります。

元禄時代、京都の知恩院山内入信院義山の著『御伝翼賛遺事の津戸三郎為守事蹟の項』に「谷保村の内に津戸ヶ淵という所あり、此所へ古大なる淵にて毒蛇のすみけるか、度々大水の難あいて田畠をあらし、人民を損さしけるを津戸三郎、彼の毒蛇を退治せられしとなり。それより世人呼で津戸ヶ淵という。今は、田地となりて只その名のみ残せり」とあります。当時、洪水が農地を荒らし、治水が課題であったことを示しています。『武蔵名勝図会』にも引用されています。昭和15年発行地図には載っています。（※4,※6）

8) 蛭田（ひるた）

荒田のたまりの北西部一帯を「ヒルタ」といわれていました。ここに注ぐ用水堀を「アキスイ」と言い、流れがなまぬるく、蛭（ひる）などがたくさんいるところから、この名がうまれたものと思われます。ヒルタの北方は「寺の下」即ち南養寺の下の意で、ここに流れている川を「寺の下川」といいます。（※3・P99）

9) 御岳前（みたけまえ）

御岳とは御岳神社のことです。徐地として、その敷地の年貢が免除され、五穀の神として、鎌倉時代に、西多摩郡御嶽神社より分祠祭されたと言います（※2 中巻, P656）。主神は中古蔵王権現と伝えられています。小さな塚の上に建てられた小社で、かつては石神部落南部の田圃にありました。高速道路の建設で、谷保1262番地に場所を移しました。



図 9-3 御岳神社

10) 岨（はけ）

谷保田圃の北方段丘上一体を「はけ」と言います。この名称は、武蔵野台地の段丘をはけと称しているのと同じです。（※3）

11) 三屋（さんや）

谷保田圃の南端、多摩川堤防沿いにも「さんや（三屋）」なる集落がありますが、ここは現在府中市に属しています。（※3）

12) 古土手（ふるどて）（谷保上新田3120付近）

中央自動車道と日野バイパスの中間辺りの、府中用水上流南側のわきにある小堤防で。江戸時代まで、多摩川敷が、ここまで続いていた名残です。

9-5 はけ下、東側地域の地名

1) 藤井・井口（ふじい・いぐち）

千丑むらの南方岨下（はけした）にある。藤井と言ひ、井口（湯口）と称するのはこの辺りに清水が湧き、井戸を掘らずに湧き水を利用していたことによります。またここには、「吹上げ」と呼ばれていた農家もありました。鋳物の“吹上”と関係があるのではないかとされていました。（*3）

2) 河原がた

天満宮社のある所は旧甲州街道の南側で、この辺り一体は「河原がた」と呼ばれていました。永享4（1432）年の野水の流出と、文政年間（1818～20）三年越しの大雨で多摩川が氾濫し、一面泥海と化し、水の引いた後の石河原が「河原がた」であるといひます。大正12（1923）年から昭和5（1930）年にかけて三回の甲州街道の道路改修があり、この改修によって、道路脇に居た人達は北へ南へと住居を移す事を余儀なくされ、坂下地区は、大きく変わりました。（*20-3）

3) 天神下あたりの地区、坂下の南部

（米池、メメダ、五反田、松原、川窪、下ノハケ、下ノ水窪、図5-1 参照）

谷保天神の下にある天神下には、寛永年間（1624～44年）の創設とされる白山様（かつては佐伯茂さんの田圃の中といわれている）という小さな祠がありました。これが下組にある白山神社に移ったとの説もあります。虫歯の神様として信仰する人も少なくなかったようです。その祠の北側にコメケ（米池）の谷保用水の分流（米池堀、松原堀）があり、そこに架けられている橋が出井の橋、北方一体は、コメケ、その南方が出井崎（谷保天満宮の谷から沖積地の一帯にかけて、拡がる地域）、さらにメメダ・五反田（ゴタンダ）・松原（マツバラ）、川窪などの、谷保田圃でももっとも豊かな水田がひろがります。これに続いて、はけ下の字名は、下ノハケ・下ノ水窪と東へ連なります。マツバラは、氾濫防止のために松を植えたことから字名ができたといわれます。（*2 中巻 P656,*5・P160）

10. 参考

1) 字名の表記と読み

字名のうち、「峯」は「峰」、𪛗は「の」「ノ」「乃」、「峡」は「岨」などが使われています。出典記載のものは、そのままにし、加筆した箇所は極力「2007版 国立全図」の表記に従いました。ちなみに代表的な資料に記載された表

記は下表の通りです。

字名の表記 比較(町内の該当字名は、相違のあるものを記述)

現在の町名	出典	年度	字名									
	T10谷保村	1921	上峯下			西原	上下	寺下	峽下	下下	東原	峯西
富士見台	くにたち公報	1965	上峰下	滝の院	峰上	西の原						
	南部地域図	1969	上峰下				上之下		峽之下	下之下		
泉1	くにたち公報	1992					上之下	寺之下	岨之下			
富士見台1	くにたち公報	1994	上峯下			西之原					東之原	
青柳1,3	くにたち公報	1999	上峯下									
泉4	くにたち公報	2000					上ノ下	寺ノ下	岨ノ下			
泉3,矢川3	くにたち公報	2004					上ノ下		岨ノ下			峯面
	国土地理院	2006	上峰下							下之下		
	国立全図	2004	上峰下	滝ノ院						下之下	東之原	
	国立全図	2007	上峰下	滝ノ院						下之下	東之原	
	都市計画図 (東京都)	2007	上峯下	滝之院	峯之上		上之上	寺之下	岨の下	下之下	東之原	

11. 出典・参考資料 ([]内の図書記号は 国立市中央図書館、()は中央公民館)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7(1995)年 [10・B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63(1988)年 [10・B1]
- 3) 国立歳事記 原田重久 昭和44(1969)年 [10・B1]
- 4) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42(1967)年 [10・B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1975)年 (291)
- 6) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16(2004)年 [10/C6]
- 7) 江戸名所図会を読む 川田壽 東京堂出版 1990年 [01/C4]
- 8) 国史大辞典13 吉川弘文館 1992年 [R291]
- 9) 日本人物文献目録 法政大学文学部史学研究室 1974年 [R281]
- 10) 日本人名大事典 平凡社 1938年 [R281]
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 日本史用語大辞典、日本史用語辞典 柏書房 1979年 [R210]
- 20-1 国立の生活誌 一古老の語る谷保の暮らし(一) 1982年 第14集 [10/D1]
- 20-3 国立の生活誌Ⅲ谷保の講中倉と講
- 6 国立の生活誌 古老の語る谷保の暮らし(三) 1988年 第25集
- 22) 日本歴史地名大系13(東京都の地名) 平凡社 2002年 [R291]
- 26) 市報くにたち
- 93) 国立市南部地域図 昭和44(1970)年11月 国立市企画開発本部 作成
- 103) 国立市(谷保、青柳、石田)町名整理(答申) 平成2年3月31日 国立市町名整理審議会